

【経緯】 現在光明院にある大日如来庚申塔（庚申講と念仏講の祈願対象として1666年造立）の設置場所の一つだった「浄円坊」を3月調査し概ね場所を確認し、4月連絡の窓に投稿。その際、詳細場所等を別途調査としていた。今回流山寺ご住職等にヒアリング情報を基に、追加レポートとして投稿する。

【見解】 昭和38年頃の江戸川堤防の改修による旧県道改修と新県道建設までは、現堤防の中段辺りが堤防上段であり、松戸～流山間のバスが走行していた。其の頃まで「浄円坊」は旧流山橋たもと土手の下にAあった。「浄円坊」はその後廃止され敷石のみ赤城神社階段下左手の公園フェンス際Dに置かれている。一方大日如来像はその後「8丁目1249」地蔵場所Bに移設され、後に光明院墓地Cに再移設された。

【ヒアリング模様】 4月6日10:30～11:25(佐藤(茂)眉山住職が同席)

①流山寺眉山住職(60半ば)：近所の古老に昨日聞いた所「浄円坊」はあった。A場所(=現地案内)。当時寺の墓域はずっと広く斜めに旧県道側に延びていたが、S39一部墓域を売却し本堂再建の費用に充てたと亡父談。S38頃の県道建設に伴い付近の家屋も移転、松戸からのバスは改修前まで今の堤防の中段辺りの堤防上を走行。旧県道は本当に狭い道。道路や土手の形態が大きく変化。自身の小さい頃だったため「浄円坊」記憶無し。地蔵があったB場所のみ記憶あるがそこに大日如来あったかは定かでない。写真*は、地蔵場所のような気がする。浄の字や八十八ヶ所後継同番から、光照寺(浄土宗)に関係あるかも知れない。

(*写真とは「におどり4号掲載写真。以下同。)

②山内さん(男80超え)：浄円坊はAの辺りだが、県道工事でなくなった。赤城神社の階段下のブランコの所に残置してある石は自身の弟たちが運搬。写真の場所は「地蔵の所Bにも思えるが写真では、よくわからない」。

③高山さん(男70前半)：浄円坊の場所も名前も聞いた記憶なし

④秋元さん(女90超え)：県道移転に伴い、堤防際から現在地に曳き家。家の近くの垣根をかき分けると細い道の先に「ジョウエン坊」があった。A場所だ。一間位の小さな家もあった。朝鮮出身の方が一人住まいで守っていた。写真の場所Bの様子は分からない。

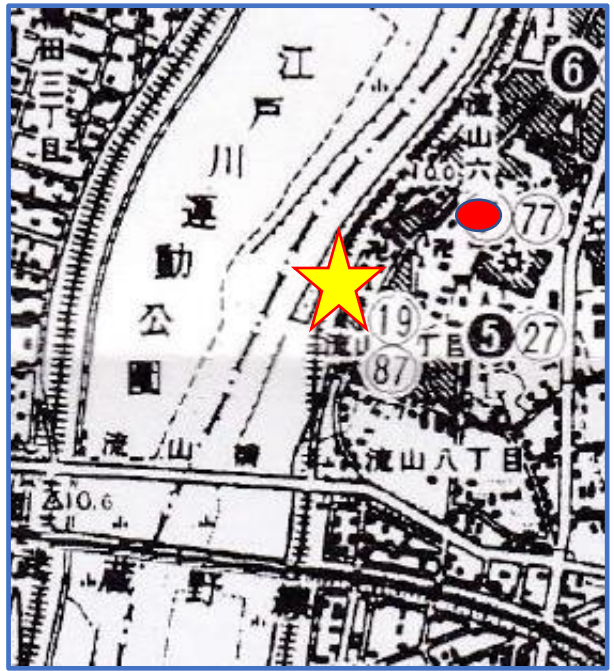


2021.3.12各地図を携え探索したが、「浄円坊」場所が地図により異なり探し出せなかったため、通りがかりの80歳代位の方に尋ね各●の場所ではなくこちら辺★にあったと教えていただいた。又、浄円坊の敷石が赤城神社境内の階段下の遊具場所の隅に置いてあると教えていただいた。

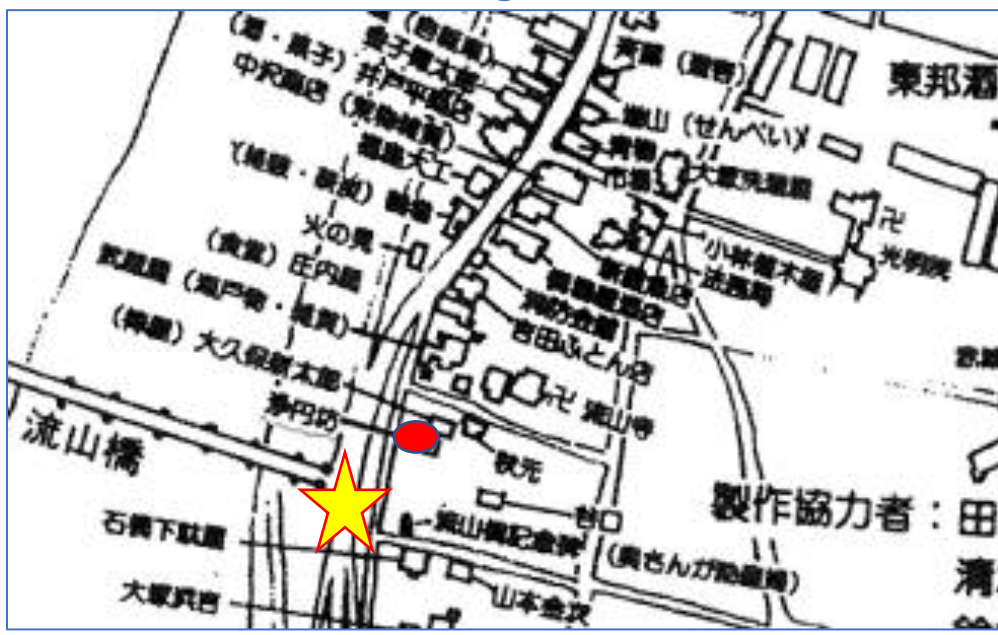
3/12,4/6 各探索&ヒアリング時の携行資料

- ・地図：①②③
- ・写真写し「におどり4号」の常円坊と言われる写真
- ・「流山の江戸時代を旅する」(光明院の大日如来) 青木更吉著

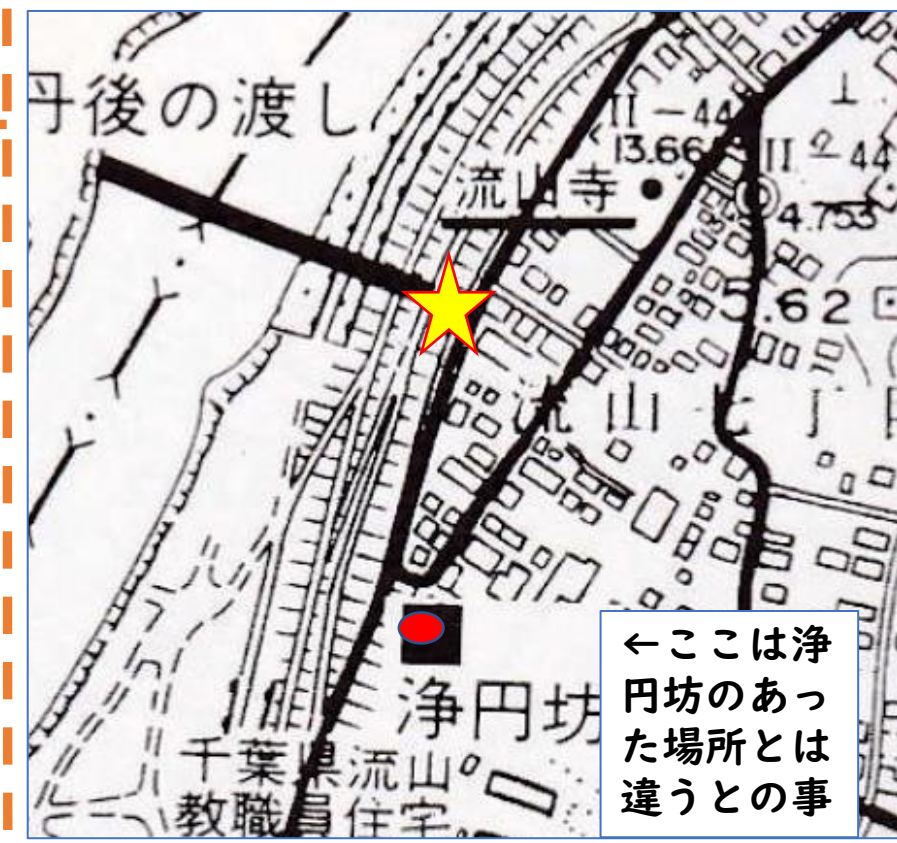
地図①



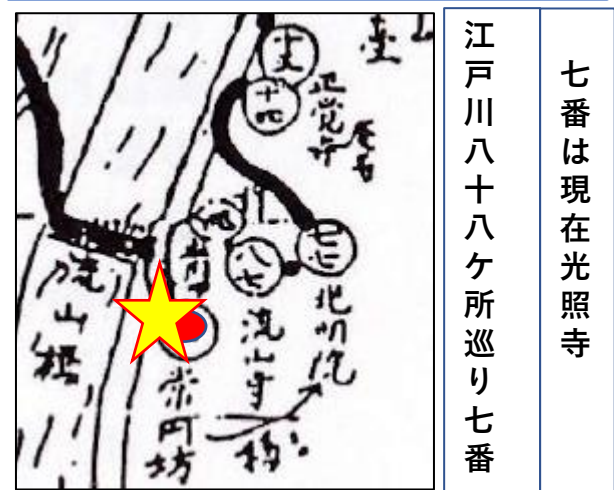
地図②



地図③



←ここは浄円坊のあった場所とは違うとの事



(昭和28年当時の流山町県道沿い町並み) 地図

「流山電鉄七十八年」

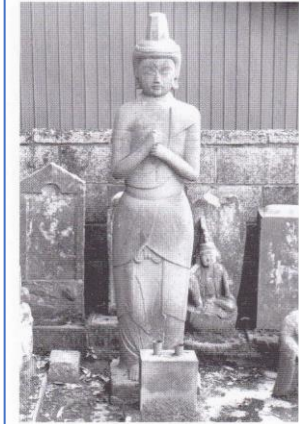
「流山の道」掲載地図

「流山の講」掲載地図

「流山庚申塔探訪」

「におどり4号」写真

「流山の江戸時代を旅する」
(光明院の大日如来) 青木更吉氏著



(背面)

テーク

奉造立庚申供養並念仏供養衆二世

成就処

寛文六
丙午年

(金剛界大日如来立像)

(蓮座)

【005】

寛文六年(二六六)

丸彫型

総高167cm

流山・光明院

54

元・流山8の御先



におどり

第4号

'80/5.10

流山市郷土資料館友の会会報



光明院の大日如来 ■流山の江戸時代
博物館友の会の会報「におどり」第4号(昭和55年)の表紙写真は、横村克宏さんの「大日如来像」。場所は流山7丁目の浄円坊の前だが、元はその100メートル北(7丁目、流山寺北)にあったと横村さんは書いている。移動した理由は昭和38年頃の河川改修のため。横村さんが撮影したあと、8丁目1249へ移動したことが「流山庚申塔探訪」に出ている。さらに4回目の移転(56年頃)は、光明院墓地に落ちついている。引越しが好きな仏像らしいが他所へ出るわけにもいかず、道端はどこも窮屈だったようだ。
この仏像は大日如来立像だが、大日様、如来様とも略され、観音様や地藏様とも呼ばれる。また、おたけ地藏とか、親しみを込めて「おたけさん」とも呼ばれる。庚申塔にも分類されるのは、背面の「庚申供養、念仏供養衆二世成就処」と刻まれているから。建立は寛文6年(1666)だというから、流山本町のさきかけの仏像である。
光明院前住職の椎橋俊恭さんは、「穏やかで優しいお顔をしています」と言った。また、「すつきりした立ち姿」と言う方もいて、今でも花や線香が絶えない。